

真を撮る。また赤ちゃんにエンピツ(연필) 糸(실) お金(돈) など準備して、いくつかの品から一つを選ばせる。例えば赤ちゃんがエンピツを選んだら、将来は学者になり、糸を選んだら長生きをし、お金を選んだら金持ちになるというような占いを行うのが習慣となっている。このような1歳のお祝いは、最近ではホテルなどを借りて、100人程度の客を招いて、豪華盛大に行うのが普通になってきている。ソウルに住む家内の妹夫婦もその慣習に従った。

韓国においては、近年、少子化の傾向にあり、子供の数は日本と同様に1人ないしは2人となっており、また一方で伝統的に男子による相続制度の観念が残されている。よって、一人っ子として生まれた男児には、その一家の命運がかかってくるため、子供のお祝い事にはたいへんな準備と労力が費やされることになる。大切に育てられた男子は韓国語で「玉童子」(옥동자)と呼ばれる。なお子供の数が1人である家庭は、男子の出生を望むケースが多くなり、それを人為的に調整している面があるために、現在新生児における男子の割合が非常に高くなっており、社会的な問題となっている。(韓国における伝統的な出産・相続については、韓国映画『シバジ(씨받이)』[86年、イム・グォンテク(林權澤)監督]がその問題点を指摘しているので、観賞を勧めたい)

果たして、私の家にもソウルの家内の実家から大量の全羅道ワカメや高麗人参(고려인삼)が常時送られてくることになった。こうして家内が産院から退院したその日から、朝食でワカメスープを作るのが私の一日の日課となった。韓国では、ワカメスープを毎年の誕生日(생일)でも飲む習慣があり、スープを作ってくれた母(어머니)に出生時の感謝をすることになる。我が家では、ワカメスープを作っているのは父親である私であるので、子供に感謝されるのは母親となるかどうかは少し疑問である。

韓国の「姓名」と 日本の「氏名」について

法学部
常石 希望

(一)

「姓名」とは「なまえ」あるいは「人名」のことである。日本では「氏名」あるいはその一部を「苗字」とも言う。英語なら「Name」と言えば済むのに、上のごとく「なまえ」「人名」「姓名」「氏名」「苗字」などと多様な言葉を持つのが東洋の言語の妙である。

これらのうち歴史的に見て重要なのは「姓名」と「氏名」である。韓国には「姓名」という言語およびその文化は存在するが、「氏名」という言語と文化は日本にしかない。実はこの差が決定的な差である。

古来、中国や朝鮮半島では「姓不変」「同姓不婚」「異姓不養」という三者が「姓」に対する三大鉄則、従ってより本質的には「家族制度」に関する三大鉄則として考えられて来た。朝鮮半島では、朝鮮王朝時代を治めた大法典『經国大典』にこの思想がよく表されていて興味深い。

上記三大鉄則のうちまず「姓不変」というのは、男も女も生涯を通して自らの姓を変えないこと、特に女性は結婚しても姓を変えない点は日本と対照をなす。第二に「同姓不婚」とは文字通り同じ姓の者どうしは結婚できないこと。第三の「異姓不養」とは、養子(幼ない子供)は同姓の一族の中から取り、日本的な婿養子制度などは考えることもできないのである。いずれにしろ中国や朝鮮が鉄則として守り続けて来た「姓と家族制」に対し、日本だけが全く異なった孤立的態度を維持して来たことがわかる。

(二)

韓国の「姓」の概念をもう少し詳しく見るため上の三大鉄則のうち第2「同姓不婚」を例に取って考えてみたい。またそれに関連して、悪名高き「創氏改名」の実態を見たい。

「同姓不婚」の原則は、すでに高麗時代に始まり朝鮮王朝時代の500年間に定着する。そして実に、6年前の1997年まで「民法第809条」に堂々とうたわれ続けて来た法律であった。この法律のため泣いて別れた若いカップル、自殺にまでおよんだケース、結婚ならぬ同棲を生涯続け子供は私生児としてしか扱えなかった家族、これらは数知れないと言われる。筆者の知人にも、実際こうした人が存在した程に韓国では身近な問題でもあったのだ。

ところでここで「同姓不婚」とする場合の「同姓」とは何を指すのであろうか。日本人的思考方で言えば、例えば「山田」という姓の人間は皆同姓であり、山田どうしの結婚禁止、これが「同姓不婚」だと判断しえよう。上述したごとくこれが日本人的「氏名」概念であるからだ。その特徴は二点に存す。第一、山田が「氏」であり、太郎が「名」であること。第二、山田という「氏」は普通は家族全員に共通していること。この二点が日本的「氏名」の特徴である。

しかし韓国ではすでに述べた「姓不変」の原則によって、女性は結婚後も姓を変えない。従って家族内にあっても、祖母や母や嫁はそれぞれ別姓(異姓)を持つのであって、「氏」と「姓」はまず

この点で明確に異なる。さらに2点目は、韓国の姓はいわゆる「本」あるいは「本貫」を含む点である。今これを上のように図示すると分かりやすい。

3世代6人という韓国ではよくある家族構成の図である。嫁いで来た者(祖母・母)が異姓である点、および広義の「姓」が金海や蜜陽、全州といった地名で示される「本」「本貫」(一族の源出身地)を含んでいる点がわかる。つまり「同姓不婚」の「同姓」とは「金」どうしの結婚禁止ではなく、韓国人にとっての本来の姓である「金海・金」どうしの結婚禁止の意であり、同じ「金」でも「金海・金」と「安東・金」は「同姓」に含まれない。韓国人の「姓」とは単なる金や李ではなく、「金海・金」であり「全州・李」なのであり、この点が日本人の「氏名」とは根本的に異なる点である。

(三)

「創氏改名」に関して一言。「創氏改名」は1939年11月公布され、翌1940年2月から8月を期限とし、6ヶ月以内でなされた。36年間におよび日帝植民地時代の最後の6年間のことであった。しかし「創氏改名」の具体的内容およびその実態に関しては余りにも多くの誤解や勝手な解釈に満ちている点は、一般によく認識されていない。「創氏改名」とは直接的には以下のごときものであった。

—広義の「姓」—			
[本]	[姓]	[名]	
金海	・ 金	・ 玉均	(祖父)
蜜陽	・ 朴	・ 孝和	(祖母)
金海	・ 金	・ 俊浩	(父)
全州	・ 李	・ 恩恵	(母)
金海	・ 金	・ 善一	(長男)
金海	・ 金	・ 信子	(長女)

図1

[本]	[姓]	【氏】	[名]
金海	・ 金	・ 松本	・ 玉均 (祖父)
蜜陽	・ 朴	・ 松本	・ 孝和 (祖母)
金海	・ 金	・ 松本	・ 俊浩 (父)
全州	・ 李	・ 松本	・ 恩恵 (母)

図2

先の「図1」と比較すればよく分かるように、それは従前の韓国「姓名」を残したまま、「氏」という家族全員に共通した日本的「家族制度」を強制することであった。従って直接的には、韓国人



「韓国の国鳥、^{カサギ}까치（かささぎ）」

韓国では、この鳥の鳴声を聞いた日には家族、親類、縁者からのよい知らせが舞い込んで来ると言われる。

～ソウル、秘苑にて～

から固有の姓名を奪った」とは言えない。上述のごとく、本来の姓名そのものは残した上での、「氏」の追加（創氏）であったからだ。ポイントは2点である。「姓不変」の鉄則を曲げ、家族全員に同一の「氏」を与えた点。もう一つは、「金玉均」という「姓名」を「松本玉均」という「氏名」に改めた点。また先の6ヶ月という申請期間に約80%が申請、なかには「李光洙 香山光郎」のごとく「名」まで日本風に変更する場合もあったが、6ヶ月という短期間で80%もが申請を済ませるとするのは余程の強制、強迫がなくてはとても達成できるものではない。ところで申請をしなかった20%はどうなるのか。「図2」の「松本」の部分に父権の姓である「金」が、家族全員に自動的に「氏」としてつけられた。つまり「金海・金・金・玉均」のごとく。

「創氏改名」が以上のごとくであれば、それは直接的には「韓国人の姓名を奪った」とか、韓国人が命ほど大切にしている「族譜（家系図）」を断絶化させた」とは言えず、これらは誤解であるか後に勝手に与えられた解釈なのである。この点では、例えば小説 梶山季之『族譜』などはこの誤解に支配されていて、小説の「筋立てがまったく創氏改名の史実とかけはなれており、つじつまの合わない誤解と独り合点のオンパレードである 宮田節子、金英達、梁泰昊『創氏改名』明石書店、

1992、73頁、および「はじめに」参照」。

日帝が真に目論んだのは、こんな表層的な名前の変更などではなく、族譜の断絶化などでもない。このような主張は、かえって反論に打ちまかされてしまうしかない。日帝が目論んだのは、きわめて注意深く細心の考慮をした上で、韓国人の「姓名」はそのまま残し、「族譜」も断絶化しないように、日本的「氏」をしのばせ、よって「家族制度」そのものを日本化しようとする点に本来の眼目が存したのである。従ってそれは、「名前」の問題というよりは国家の基本単位である「家族、家庭」の改変の問題と言えよう。また数年後に始まる「朝鮮徴兵制」との関連も当然存した。「創氏改名」と併せて、朝鮮総督府は「婿養子、異姓養子」を大いに推奨しこれを同時併行的に制度化するのである。総督府発行の「創氏改名」の資料には「婿養子・異姓養子制」がワンセットになっているものもある。

初めに挙げた「姓」に関する三大鉄則、「姓不変」「同姓不婚」「異姓不養」のうち2者をワンセットにして崩し、よってその家族制度そのものを改変しようとしたのが「創氏改名」であったと言える。しかし、さすがに「同姓不婚」にはその時点では干渉できなかったようである。

それにも拘らず、日本の敗戦や解放後、再び三大鉄則を回復した韓国が、50年後の1997年まで「同姓不婚」を廃棄せねばならなかった点は、歴史の皮肉と言うべきであろうか。